

木曾の伝統・漆に学ぶ

長野県林業大学校 林学科 2年 ○ 湯澤 充尋 ゆざわ みつひろ

要旨

里山林を有効活用しながら、文化・芸術的価値のあるものをつくり、農村部の活性化を図る方法のひとつに、漆器づくりが考えられます。漆器の産地・木曾平沢を訪ね、漆器の作り方や性質について学びました。また、そこで得た知識をもとに、自分で実際に簡易的な漆塗りを行い、漆に関する理解を深めることとしました。

はじめに

私は、地元の活性化を考えるにあたって、「自然と文化の共生する村」をテーマに昨年から研究を続けています。里山地域に存在する豊かな自然環境や生活スタイルが、地方に移住者を呼び込み、里山で暮らす人が増えることで里山林などの利用・整備が進み、住人自らが文化・芸術活動を行っていくことで、住民間や他地方の人々との交流の促進や生活活力の向上が見込める、というものです。

これらを鑑み、私自身も里山資源の有効利用と文化・芸術的な要素を持ち合わせた仕事を職業にしたいと考えるようになりました。そこに当てはまるものとして、今回、漆器づくり及び漆の生産に焦点を当てて学習をはじめることとしました。

1. 木曾漆器の歴史

まず、林業大学校と同じ木曾地域の漆器産地に出向き、漆器に関する情報を集めることにしました。今回資料館などを見てきたのは、塩尻市木曾平沢です。

木曾平沢で漆器作りが始まったのは、1602年の中山道開通のころといわれています。飛騨から漆塗りの技が伝えられ、春慶塗や曲げ物などを製作し、奈良井宿などで旅人に向けて販売されていたそうです。

明治初頭には、集落付近の沢から「さびつち 錆土」が発見されます。錆土は、粘土質の土で、漆器の下地に使用されます。この下地固めの技術により、木曾漆器はより堅牢なつくりになり、全国有数の漆器産地に成長しました。1975年には、経済産業大臣指定の伝統的工芸品に木曾しゅんけいぬり春慶塗、塗り分けいろぬり呂色塗、木曾ついでぬり堆朱塗が指定され、名実ともに伝統工芸品として認められます。伝統的工芸品の生産額は、石川県の輪島塗に続いて全国2位となっています。(平成13年のデータ)

2. 漆について

漆は、栽培種であるウルシの木から採取されます。採取法には養生掻きと殺掻きがあり、日本では殺掻きと呼ばれる方法で採取することが多いです。これは採取後伐採して萌芽更新を促す方法です。更新して次の採取まで8~12年程度掛かるといわれています。時間が掛かり、なおかつ1本のウルシの木から一度に200gほどしか漆液を採取できないため、現在は漆掻きをする人が著しく減少しています。現状、漆の90%以上が中国産で、国産はほんの数%です。

採取された漆は、濾してきうるし生漆、精製してすまうるし透漆などとして利用されます。この漆の主成分はウルシオール、ラッカーゼ、ゴム質、水分などであり、ウルシオールが酸化酵素であるラッカーゼの働きで

酸化重合し硬化します。この反応には温度 25～30℃、湿度 70～80%程度が必要であり、漆器の乾燥には、室（ふろ、むろ）と呼ばれる専用の乾燥室を用います。なお、一般の塗料のように水分を蒸発させる方法で乾燥をさせると、漆は固まらなくなってしまいます。

3. 拭き漆の実験

実際に漆塗りについて知るため、市販の漆を購入し、個人でも比較的作りやすい拭き漆という技法で漆塗りを行いました。

まず、用意した木地に写真-1のように生漆を塗り、布で木地に摺り込みます。それを丸2日かけて乾燥させた後、紙やすりで表面を磨き、再度漆を塗りこみ乾燥させる、という手順で製作を行いました。乾燥は、ダンボール箱に電気アンカと濡れ雑巾を入れ、温度と湿度を管理することで乾燥に成功しました。乾燥後のダンボール内の温度は 15℃、湿度は 95%でした。実験中の火災を警戒したためアンカの設定温度が低く、理想の温度には届きませんでしたが、拭き漆は塗膜が薄いため乾燥できたものと思われます。このときは 11 月でしたが、漆が乾きやすい梅雨の時期や夏のほうがより乾燥が容易で作業に向いているようです。

また、何回か漆が皮膚に付着しましたが、かぶれが起きることはありませんでした。ただし、アレルギー反応はいつ起きるか分からないため、今後も注意が必要だと感じました。



写真-1 生漆を塗る作業



写真-2 試作漆器（2回塗）

おわりに

漆器というのは、日常使いの道具から、芸術として極められた作品までその手法も用途も大変幅が広いです。食器類や家具といった実用品から、蒔絵・螺鈿・沈金といった美術的手法まで幅広く、奥が深いと思いました。今回学習してみて、私が標榜する「自然と文化が共生する村」という考え方にも当てはまる職業だと改めて実感することができました。

一方で、漆器産業は、需要の減少や後継者不足などに悩まされています。漆器のもつ可能性は限りなくあると思いますが、明るい未来ばかりを想像できない現状も確かにあります。私が就職し、働いていくためにはどうしたら良いのか、残り 2 年間の学生生活を利用して見極めて行きたいです。そして、林業を学んだ身として漆の生産から漆器作りまでを一貫して行い、地域の活性化に漆器職人として関わっていける日が来るように、これからも学習を続けて行きたいと思います。

参考文献等

- 1) 久野恵一 監修 萩原健太郎 著 民藝の教科書③ 木と漆
- 2) 漆器産業全体の現状
http://www.city.sabae.fukui.jp/users/monodukuri/japan_sammito/img/sikkisangyo.pdf
- 3) 木曾漆器館 塩尻市木曾平沢